

# 社会調査方法論の実践的研究

前田 忠彦 データ科学研究系 准教授

## 1. はじめに

- 筆者のテーマ: 調査データを素材とした社会調査方法論研究。実践と研究が一体を成す研究スタイル
- 社会調査には様々なプロセスの全ての段階に調査方法論上の研究課題が潜んでいる。
- 共同研究を含む具体的な調査の実践を通して得たデータを材料として研究を進めている。

## 2. 調査プロジェクトの例

### 2.1 日本人の国民性調査および関連調査

統計数理研究所が1953年以来5年に一度実施している「日本人の国民性調査」(最新調査は2018年実施の第14次全国調査)。同じ調査手法(訪問面接法)、同じ調査項目で横断調査を繰り返すことを基本とした継続社会調査。5年に一度の本調査実施の他に、中間年には様々な関連研究を行っている。

### 2.2 共同調査研究の例

- 「格差と社会意識に関する全国調査」(2010年) 大阪大学との共同調査

多数の研究者による共同研究体制、企画・実施から解析まで、大阪大学との連携下で多数の成果。

- 「第4回鶴岡市における言語調査」(2011年): 国立国語研究所との共同調査

1950年に第1回調査が両研究所の協力で実施されて以来、1972年第2回、1991年第3回と約20年間隔で実施。山形県鶴岡市における共通語化の進行を、各回のクロスセクション調査と、パネル調査を組み合わせたデザインで研究する継続調査。

## 3. 具体的な研究テーマ例

### 3.1 調査員効果に関する研究

調査員の持つ何らかの特徴が調査結果に与える影響「調査員効果」について二つの面からの研究

#### (1) 調査員特性が、回収・非回収に与える影響

調査地点の特徴や調査員特性を含めたマルチレベル分析により、対象者・地点・調査員の特性と回収状況の関連を総合的に検討

#### (2) 調査員属性が回答内容に与える効果

特定テーマの調査項目に対して、調査員の属性が回答者の回答内容に与える効果の可能性を検討

### 3.2 調査パラデータの解析—訪問記録を例として

パラデータ: 調査の実施プロセスに付随して得られる様々な情報(例えば面接調査における調査員の訪問記録)。分析結果を調査員行動の理解につなげる。

### 3.3 調査モード間の比較研究

調査モード: 対象者から回答を取得する手段

調査員が回答を面接で聴き取る→「他記式」

対象者が自ら調査票に回答を記入→「自記式」

回答に調査モードが大きく影響することがある(図の例)。傾向スコアを用いて回答者の属性(共変量)の分布が二つのモードで異なることを調整した上でも消えないケースも。「社会的望ましさ」への対象者の敏感さが両モード間で異なる反応を引き出す可能性?

あなたは衆議院の総選挙があるとき、ふつうはどうしますか?

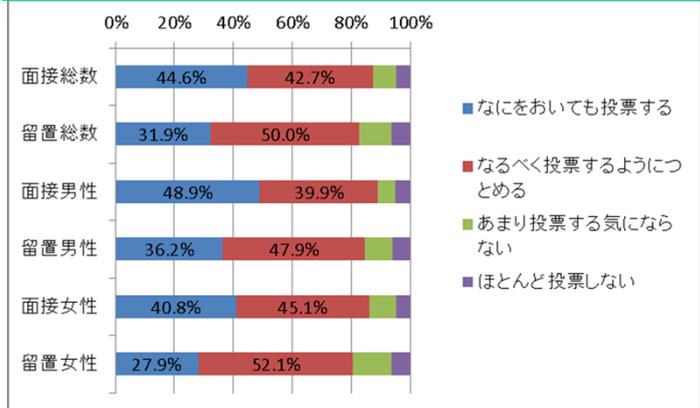


図. 著しい調査モード効果が見られる例: 留置法よりも面接法によるほうが、投票意向がかなり高めに回答される(統計数理研究所による2012年度中の実施調査から)

### 3.4 調査不能バイアスの調整

背景: 近年の社会調査特に面接調査における回収率の低下→調査不能バイアスが懸念される事態。

### 3.5 標本設計・サンプリングの精度等に関する検討

サンプルの設計と、その設計下での調査精度の評価は、社会調査設計上の重要な論点の一つ

## 4. 社会調査法研究のこれから

- 社会調査のプロセス全体にわたって、調査方法論上の研究課題→最も伝統的な調査手法である面接調査法に限っても、様々な検討課題が残る。
- 他方で、回収率が低下し続ける訪問面接法による調査研究には限界が見え始めている。
- 伝統的な手段に代わる、現代社会にふさわしい調査方法の研究も必須である。